

ルーアンにおける革命祭典とジャコバン＝クラブ （二七九〇年－九三年）

竹 中 幸 史

【要約】 フランス革命期、地方の政治結社と革命祭典とは共に、市民の政治的な文化変容をうながす「教育」の場であったが、その実態や地方政治との関係はいまだ明らかではない。そこで本稿は、ルーアンの例を取り上げ、地方における革命祭典の実態、および地方ジャコバン＝クラブの政治文化面における活動と祭典との関係を探ることにした。ルーアンの革命祭典は、その初期、旧制度下の祭典との連続性が顕著であるが、九二年以後新しいシンボルが登場し、九三年になると、祭典の非キリスト教化、組織者の変化、また参加者の民主化が見られた。さらに同時期、祭典のテーマとして「死と再生」が現れるが、九二年に自由の木植樹や政治状況をも反映するものだった。一方クラブは、革命初期、祭典にほとんど参加していなかったが、九二年に自由の木植樹や独自の祭典組織によって政治文化の闘争を開始し、九三年以降は公式の祭典の組織・運営に積極的に関わった。また革命祭典以外でも、非キリスト教化運動やデカディの祭典組織など、「公教育」全般をつかさどるようになっていった。そして九四年に組織された市公教育委員会をクラブのメンバーが占めるにいたって、行政の領域だけでなく、政治文化の領域においても、クラブは独裁を開始したのである。

史料 八五巻一号 二〇〇二年一月

はじめに

フランス革命期には、市民たちの未曾有の政治参加が見られた。その媒介となったのが、全国に叢生した政治結社、とくに地方ジャコバンクラブである。これらは、近年の革命史研究において注目を集めており、ケネディやブテイエおよびブートリーらの総合研究だけでなく、クラブ同士による情報交換のネットワークや公共圏との関係、また文化変容などの観点を踏まえた個別研究が数多く出されている。革命史研究の泰斗ヴォヴェルの近著も、革命期から二〇世紀までの「ジャコバン」を新たな研究視角から問いなおした試論だが、こうした研究に共通しているのは、クラブを革命期に生まれた新たな社会的結合関係（ソシアビリテ）として捉える視点である。二宮宏之は、ソシアビリテ研究の課題として、ソシアビリテの形成・変容過程への注目、外部世界との関係の分析、表象論との接合を挙げているが、ジャコバンクラブの研究で特に重要となるのは、第二点、なかでも「政治の契機との関わり」であろう。なぜなら地方ジャコバンクラブは革命政治ときわめて密接な関係を持っていたのであり、その幅広い活動や多大な影響力が、革命の真の動因であったといっても過言ではないからである。

筆者も以前、ルーアンのクラブ（民衆協会）を取り上げ、そのメンバー構成と活動、とくにクラブが地方政治へ参入してゆく様子を検証した。そして革命が進むにつれ、クラブのメンバーが市政の中核を占めるようになったことや、クラブが政治議論に留まらない諸活動（国防、革命軍組織、治安維持や革命祭典の組織など）に従事し公共機関化してゆくことなどを明らかにした。そしてクラブが市民の「政治化」を促したという見通しを得たのであるが、本稿では、この政治化に注目し分析を進める。そのさいクラブの行った諸活動のうち政治文化の領域と関わるもの、特にクラブのメンバーと市民とが直接交流する革命祭典をとりあげたい。

クラブが革命祭典や政治文化の定着に関わっていることは、これまでもしばしば指摘されてきた。例えば一七九三年以

降、クラブは祭典の組織や非キリスト教化運動の進展に関与したことが明らかになっている。^⑤ またケネディによれば、革命当初からクラブは連盟祭やミラボーの哀悼式典などの祭典組織にかかわり、九二年以降、諸シンボルの普及などに尽力した。そして九三年になると、様々な革命祭典への参加、その組織とあわせ公教育にも関与したという。^⑥ しかしこうした研究は全国のクラブの活動を巨視的に把握するものであっても、歴史の具体相、クラブの活動と地方政治との関係に注目してこなかった。またクラブの活動全般のなかで、こうした「文化戦略」がどのように位置付けられるのかといったことは説明されていない。

一方、革命祭典は、一七九〇年代以降、革命史研究のメインテーマの一つとなり、多くの歴史家が様々な手法で取り組んできた。革命期にみられた政治的対立にもかかわらず、革命祭典が祭りとしては不変の論理Ⅱ「再生」を共通して持っていたことを主張したオズーフ、^⑦ プロヴァンスにおける祭典の変容を検討し、革命祭典を四段階に分けて論じたヴォヴェル、^⑧ 共和二年における「文化変容」を論じたビアンキ^⑨などがその代表である。これらの研究の特徴は、祭典を政治的プロパガンダとはみなさないことであろう。以後の祭典研究は、祭典の政治性よりも、祭りに登場する象徴やその意味、市民の無意識下の行動の解説に目が向けられるようになった。そしてハントによる政治文化研究が進んだ後は、革命期にあらゆる事物が政治化し、祭典も「新しい人間」の教育を担うものとして期待されたということは通説となっている。

我が国においても革命祭典はおおに注目を集めたが、その研究には大別して二つの潮流があった。一つは「祭り自体」の研究である。その第一人者として立川孝一の名が挙げられよう。立川氏はアルル、アヴィニョン、マルセイユといったプロヴァンスの諸都市やパリの革命祭典の変容を跡付けている。いま一つの潮流は、松浦義弘や小林亜子らによる、祭典の「教育機能」の側面に注目する研究である。^⑩ 二人は、革命家たちが祭典の教育機能に注目した時期について見解の相違があるものの、革命祭典が広義の「教育」の一環であったことを論じる点では共通している。バラ、ヴィアラという二人の少年を顕彰する国民祭典が組織されてゆく様子を分析した天野知恵子や、一九世紀フランス史の特徴である聖俗の

対立の出発点として、革命期における「習俗」の革命を取り上げた谷川稔の研究も、こうした研究成果を踏まえたものとなっている^⑬。

以上、革命祭典の研究史の概略を述べたが、次のような問題点も残されている。第一に、地方における革命祭典の研究が少ないことである。事実、地方祭典研究はフランスにおいても端緒についたところであり、十分になされていない。しかし政治文化研究の進展に、ナショナル・ローカル双方の視点が必要なのは自明であらう。それは、文化の発信と受容、地方による独自の摂取・利用といった文化変容の実態を明らかにするからである^⑭。第二に、祭典の教育機能を強調する研究は、議会で定められたデクレや法、革命家たちの発言を重視するため、「教育」の担い手や実態についてあまり注意を払ってこなかったことである。確かに「習俗の革命」という為政者の意図は明らかになった。しかし実際に地方祭典を組織した人々や祭典の種類・構成、そして地方政治との関連など、基本的な事柄でさえ、明らかにされていないのである。こうした問題をデクレの文言ではなく、祭典の現場で検討せねばならないだろう。近年の政治文化研究においては、オズーフまたはハント流の記号論的な分析が盛んであるが、祭典の基本的な構造を捉える研究は不当に軽視されているように思われる。

以上みたように、地方ジャコバン・クラブ研究と革命祭典研究は、その実態の解明、また地方政治との関係の分析という共通の課題を有している。そこで本稿では、地方都市ルーアンの例を取り上げ、地方における革命祭典の実態、および地方ジャコバン・クラブの政治文化面における戦略と祭典との関係を探ることを課題とする^⑮。当時、ルーアンは人口七万余を抱える国内有数の大都市であった。またルーアンを中心とするオート・ノルマンディーは、共和二年に地方クラブが大幅に増加する地域であり、急速にジャコバン化が進んだ地域といえる。こうしたことからルーアンは地方都市の政治情勢、またクラブの活動の展開を追うのに格好のモデルケースを提供すると考えられる。検討する時期としては、一七九〇年からジャコバン独裁の成立する九三年末までを設定しよう。

祭典の実態については、ヴォヴェルの提示した祭典の変容モデルとの比較を念頭に、論を進める。彼の革命祭典の変容モデルを簡潔にまとめるならば、①連盟祭に代表される八九年から九一年。旧制度との連続性が顕著だが、貴族と民衆は排除される。②新しい市民的象徴が登場する九二年から九三年。祭典の民主化、カーニヴァル的な要素の復活、暴力的要素の台頭が特徴である。③国民祭典が実行に移される九三年から九四年。最高存在の祭典に代表されるように祭典は「モラル化」の機能を担う。④九五年以降。総裁政府による国民祭典も「モラル化」の役割を保持する、というように整理できよう。本稿に関わるのは①および②である。

史料としては、ルーアン市議会議事録、祭典関係の史料集のほか、クラブの議事録や *Journal de Rouen* 紙などを参考にした。さらに同時代人のブルジョワの日記史料をも適宜使用している。ただし、クラブの活動の展開を主題とする本稿の性格上、「祭り自体」の考察は十分なものではない。このことについては多角的な分析が必要であるため、別稿で論じる予定である。

- ① 地方ジャコバンクラブの研究史については、拙稿「フランス革命期ルーアンの民衆協会」『史料』八〇・四、一九九七年。同「革命を支えたソシアビリテ」服部春彦・谷川稔編『フランス史からの問い』山川出版社、二〇〇〇年。クラブにかんする近年の主要な総合研究としては M. Kennedy, *The Jacobin Clubs in the French Revolution The First Years*, Princeton, 1982; do., *The Jacobin Clubs in the French Revolution The Middle Years*, Princeton, 1988; do., *The Jacobin Clubs in the French Revolution 1793-1795*, New York, 2000; Boutry, P. et Bouter, J. (éd.), *Atlas de la Révolution française*, tome 6, *Les sociétés politiques*, Paris, 1994, など。
- ② M. Vovelle, *Les Jacobins*, Paris, 2000.
- ③ 二宮宏之「ソシアビリテ論の射程」二宮宏之編『結びあうかたちソシアビリテ論の射程』山川出版社、一九九五年、二二―一六頁。
- ④ 拙稿「フランス革命期ルーアンの民衆協会」参照。
- ⑤ M. Vovelle, *Les métamorphoses de la fête en Provence (1750-1820)*, Paris, 1976; シェル・ヴォヴェル「フランス革命と教会」人文書院一九九二年、一三〇―一三七頁。
- ⑥ Kennedy, *The First Years*, pp. 46-52; do., *The Middle Years*, pp. 102-108, 217-226; do., *1793-1795*, pp. 145-150, 161-175.
- ⑦ M. Ozouf, *La fête révolutionnaire, 1789-1799*, Paris, 1976 (立川孝一訳「革命祭典」岩波書店、一九八八年); do., *L'homme régenté*, Paris, 1989.
- ⑧ M. Vovelle, *op. cit.* 特に第二部「祭りの新しいモデルもしくは短期における祭り」。またヴォヴェル「フランス革命の心性」岩波書店、

一九九二年、二三〇-二三七頁。

⑨ S. Bianchi, *La révolution culturelle de l'an II*, Paris, 1982.

⑩ リン・ハント「フランス革命の政治文化」平凡社、一九八九年。

⑪ 立川孝一「革命祭典—フランス革命の心性史」『思想』六八七、一九八一年。同「フランス革命と祭り」筑摩書房、一九八八年。同「フランス革命 祭典の図像学」中公新書、一九八九年、など。

⑫ 松浦義弘「フランス革命と〈習俗〉——ジャコバン独裁期における公教育論議の展開と国民祭典——」『史学雑誌』九二・四、一九八三年。小林亜子「フランス革命における〈公教育〉と〈祭典〉——憲法制定国民議会期を中心に——」『教育史学会会紀要（日本の教育史学）』二九、一九八六年。同「〔POLICE〕としての〈公教育〉」谷川稔ほか『規範としての文化——文化統合の近代史』平凡社、一九九〇年。

⑬ 天野知恵子「国民国家の創設と愛国少年伝説の展開 フランス革命の英雄バラ、ヴィアラ」『史学雑誌』一〇六・九、一九九七年。谷川稔「十字架と三色旗」山川出版社、一九九七年。

⑭ ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』岩波書店、一九九四年。

⑮ これまでルーアンの革命祭典を分析したマンリックやエヘールの研究もこうした問題にこたえられていない。C. Mazauric, *Sur la*

第一章 ルーアンにおける初期の革命祭典とクラブ（一七九〇年～九二年）

本章では一七九〇年から九一年のルーアンにおける革命祭典の実態と、クラブと祭典の関係について論じる。ケネディによれば、この時期の祭典のなかでは連盟祭とミラボーの哀悼式典が特にジャコバンの感性に影響を与えたという。^①本章でもこの二つの祭典を中心に検討する。クラブの関与を論じる前に、まず連盟祭の展開を検討しよう。ルーアンでは二度

Revolution française: Contributions à l'histoire de la révolution bourgeoise, Paris, 1970; do., *Jacobinisme et Révolution*, Paris, 1984. F. Hébert, "Une dramaturgie en Révolution: la fête révolutionnaire à Rouen (1789-An III)" in: Comité de travaux historiques et scientifiques (éd.), *1789-1799 Nouveaux chantiers d'histoire révolutionnaire. Les institutions et les hommes*, Paris, 1995. エヘールの論文は「ヴォヤエルの分析をルーアンの祭典に適用し分析した修士論文 F. Hébert, "Entre politique et transcendance, Le mouvement festif à Rouen de 1790 à l'an 3" (mémoire de maîtrise. Université de Rouen, 1992) の要約」の修士論文は独創性を欠くもの。多くのデータを含み。

⑯ 革命期の市議会議事録は「Archives municipales de Rouen, série Y3, Y4, Y5. また祭典史料集は E. Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales et de Cérémonies publiques à Rouen. 1790-1799*, Rouen, 1911. クラブの議事録は E. Chardon (éd.), *Cahiers des Procès-Verbaux des séances de la société populaire à Rouen (1790-1795)*, Rouen, 1909. (以下 PV des séances de SP と省略) 革命期のブルジョワ・オルンエルの日記は G. Hurpin (éd.), *Vivre en Normandie sous la Révolution*, tome 2, Rouen, 1989. (以下 *Journal d'Horcholle* と省略)

表1 ルーアンにおける連盟祭

1 度目の連盟祭（90年6月29日）

〔祭典行列〕

- ・ 8時、祝砲。
 - ・ ルーアン市・他都市の国民衛兵、国境軍など総勢1万人が配置につく。市庁舎の鐘の音を合図に行進開始（市内4ヶ所から）
- 同時刻、市議会も行進開始。順：マレシヨセ／県内64カントンの市長・市役人／騎兵と歩兵が護衛

- ・ 10時、連盟兵のための陣営、サン＝ジュリアンの荒地に到着、合流

〔セレモニー：ミサ〕

- ・ 司教による「来れ精霊よ」朗唱／ぶどう酒とパンの奉納／司教の演説／少年の演説／司教による祈り／国民衛兵旗の聖別式

〔宣誓〕

- ・ 兵士全員による「国民万歳！ 法律万歳！ 国王万歳！」の連呼／連盟兵の宣誓、「テ・デウム」斉唱

〔大聖堂におけるテ・デウム斉唱〕（自治体のみ入場、兵士は教会の外で待機）

- ・ 司教の演説／「テ・デウム」斉唱（連盟旗が掲げられ十字架の下に掲揚）
- ・ 自治体退場

〔宴会〕

- ・ 司教、各都市の議員、軍将校らの参加

2 度目の連盟祭（90年7月14日）

〔祭典行列〕

- ・ 11時半、Vieux-palais（要塞）を出発。

順：鼓笛隊と楽団／市議会、市議会議員、市役人／国民衛兵と騎兵が護衛

〔シャン＝ド＝マルスにおける宣誓〕

- ・ 宣誓（各兵団長、兵卒）／市長の演説
- ・ 聴衆一同、「私はそれを誓う！」続いて「国民万歳！ 国王万歳！ 法律万歳！」の連呼
- ・ ルーアン司教が唱句3つをとる。「国民万歳！ 国王万歳！ 法律万歳！」の連呼
- ・ 祝砲で祭典終了

出典 Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp.19-34.

連盟祭が行われている（九〇年六月二十九日・七月一四日）。一度目は当地の国民衛兵のイニシアティブによるもの、二度目はパリの全国連盟祭にあわせて組織されたものである。表1は、二度にわたる連盟祭の展開をまとめたものである。ここから看取できる祭典の特徴は、次の三点である。まず司教の演説、ぶどう酒とパンの奉納、「テ・デウム」〔神々への讃歌〕斉唱などに見られるように、キリスト教の儀礼が多く盛り込まれていることである。祭典の進行は司教デュリイに委ねられており、一少年および市長を除けば、祭典中に演説を行うのは

彼だけである。次に、国民衛兵を中心とした軍事的色彩を挙げられよう。祭典のハイライトは彼らの宣誓とパレードとなっている。そして最後に、参加者が自治体と軍事関係者に限定されていて、民衆やアリストクラートは排除されていることである。ただし祭典後は、街中で祝宴が張られ、民衆たちも歓喜に酔いしれたようである。^②このようにルーアンの連盟祭には、オズーフやヴォヴェルが革命初期の祭典について指摘していたような、旧制度下の祭典との連続性がよく示されている。一度目と二度目の祭典の相違としては、会場が郊外の荒地から城壁の外側に隣接する兵舎の庭、シャン・ド・マルスに移っていること、また七月一四日の祭典の方が静態的、秩序志向的であることを指摘できよう。これは一度目の祭典が地方において自然発生的に生まれたものであったのに対し、二度目の祭典がバリの議会の命によって組織され、上からの秩序回復が目指されていたことによるものである。^③

それでは、これら連盟祭にクラブはどう関わったのだろうか。一度目の連盟祭は五月八日、国民衛兵によって開催が決定されたのだが、翌日の *Journal de Rouen* には早速、連盟祭開催を市民に訴える建白書が掲載されている。^④この一文を寄せた「平和と憲法の友」という団体は、のちに「憲法友の会」と改称して発足する、クラブの前身にあたる。すなわち祭典開催を市民に最初に訴えたのは、クラブだったのである。しかし祭典の参加者のなかにクラブの姿はみられない。おそらく国民衛兵のなかにクラブのメンバーが含まれていたであろうが、それは個人として参加していたにすぎない。クラブが団体として連盟祭当日（六月二十九日・七月一四日）に行ったのは、夜、集会所にイルミネーションを灯し、祝賀ムードを盛り上げたことくらいだった。^⑤六月二十九日の夜、その広間には、ボンネット帽（「自由の帽子」）を被せた槍を持ち、蛇を踏みつける女性を描いた絵画が置かれたというが、クラブは連盟祭開催に熱意を示す一方で、間接的に参加したにすぎなかったようである。^⑥

次にミラボー急逝の報せをうけて組織された、哀悼式典（九一年四月七日）について検討しよう。これはルーアンで行われた革命祭典のうち、初めてクラブが主導して組織した祭典である。四月四日、自己負担で祭典開催を決定したクラブが、

六日に市議会に参加を促して、市民祭典のかたちが整えられたのである。^⑧ 祭典は次のように行われた。午前一〇時、鼓笛隊の先導のもと、クラブと市議会からなる行列が市庁舎を出発した。大聖堂到着後、ミサが行われ、その後オーケストラによる演奏が続いた。クラブの議事録によると、あらゆる年齢・階層の市民が参列し、国民服に身を包んだ子供たちがミラボーに賛辞を捧げたという。また祭典後、祭壇の周囲に置かれた糸杉（死の象徴）が市民に配られた。^⑨ このようにミラボーの哀悼式典は、祭典行列とミサから構成されており、革命の英雄を旧制度下の祭典の枠組みで祝うという形式が見られる。

祭典後もクラブはミラボー崇拜の拡大に深く関わっている。祭典終了後に行われた会議においては、ミラボー像を議場内に設置し、また祭典の模様をパリに通知することを決定したほか、翌八日、市議会に新しい通りの名称を「ミラボー通り」とすることを要求した。^⑩ さらに五月から七月にかけて、様々な職種の市民がミラボーを偲ぶミサを行ったのだが、これらに対しクラブは、議場を飾っていた国王の胸像を貸し出すなどの協力をしている。^⑪

クラブはこの他にも祭典組織に関する議論を行なっている。例えば、九一年二月四日、聖体降福式と新国旗掲揚式典を速やかに行うことを市議会に要求している（四月一日に実施）、^⑫ 三月二日から二三日にかけては、ルイ一六世の病氣平癒を祝賀するための「テ・デウム」斉唱式について議論している。^⑬ しかしこれらはいくまで間接的な働きかけにすぎず、実際の祭典行列やセレモニーにクラブは参加していない。「テ・デウム」斉唱式にしても、一度はクラブにおいて開催が決議されながら、市議会が開催を検討していることがわかると、その決議を却下している。そして当夜、議場をイルミネーションで飾るという、またも間接的な参加で満足している。一方、立憲司教シャリエ・ド・ラ・ロッシュの歓迎祭典（四月二三日）が開かれたときには、メンバーも多数参加したと思われる。この新司教はクラブのメンバーが強く推薦した人物であり、祭典前日、議長がメンバーに、祭典の最後を飾るミサへの出席を求めたからである。^⑭ この議長は祭典当日、自治体代表とともに新司教にあいさつを行い、歓迎の意を伝えている。それでも祭典においてクラブが何らかの役目を果

たしたわけではない。^⑮

以上のようにクラブはミラボーの哀悼式典を組織したものの、それは例外に属することだった。市内の女性たちが行うミサへの出席を要請され、出向くことはある。^⑯しかし九〇年から九一年九月まで市内で行われた一三の革命祭典のうち、クラブが参加したのは、ミラボーの哀悼式典のみなのである。九一年九月一日には、国王の憲法認可を祝賀する祭典が開催されたが、これにもクラブは「正式名称は「憲法友の会」だが」参加していない。オルシヨルの日記によれば、夜になり市民が華やかな服を着て祝杯をあげているときに、クラブのある建物（旧カルム修道院）がひとときわ美しいイルミネーションで飾られ、歓喜に彩りを添えていたという。^⑰

こうしたクラブの祭典への不参加は、クラブの存在や重要性が市民に認知されていないこと、また市議会への影響力も小さいことと無関係ではないだろう。前稿において検討したように、この時期のクラブのメンバーは、市議会において少数派であったり、党派分裂を起こしたりしており、市政を左右する力はなかったからである。^⑱まだ祭典の主役は、聖職者、行政・司法機関そして国民衛兵であった。一八世紀末に生まれた市民の自由なアソシアシオンよりもブルジョワジーの民兵が優先されており、政治文化の領域でもまだアンシャン・レージュムは根強く残っていたのである。

しかしクラブは決してこの状況に満足していたのではない。例えば、九一年憲法成立を祝う市民祭典当日（九月二五日）の様子を見てみよう。午後、祭典に参加を許されていないクラブのメンバーが、通りに二体の人形が持ってきた。一体はモーリ大修道院長を、もう一体は、市内のオー・ド・ロベック通りに住む染色業者ブリュマン氏という、当時アリストクラートと目されていた人物をかたどったものである。これらの人形に対し、下層民の子供たちが中傷を加えてあたりを走り回ったという。^⑲シャリヴァリやカーニヴァルにおける民衆慣行を思わせるこの行為は、多分に政治性を帯びており、官製の祭典に対してクラブのメンバーたちが不満を持っていたことを、端的に示している。

- ① Kennedy, *The First Years*, p. 46.
- ② Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 29-30, 34.
- ③ 連盟祭はじめ市民の連盟運動と政府の対応について、拙稿「革命をよめたシンボル」一五頁 - 一六三頁。
- ④ N. Greume Breemeersch, "Recherches sur la Garde nationale de Rouen" (Mémoire de maîtrise, Université de Rouen, 1992), p. 56.
- ⑤ *Journal ou Annales de Normandie*, du Dimanche 9 mai 1790 (no. 56).
- ⑥ Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, p. 30.
- ⑦ Hébert, "Entre politique et transcendance", p. 49.
- ⑧ *PV des séances de SF*, p. 42.
- ⑨ "マボアの哀悼式典について" Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 44-46.
- ⑩ *PV des séances de SF*, pp. 43-44.
- ⑪ *ibid.*, pp. 47-48.
- ⑫ *ibid.*, p. 38.
- ⑬ *ibid.*, p. 40. シラブは三〇リールを供出することを決定。
- ⑭ *ibid.*, p. 43.
- ⑮ *Journal d'Horchole*, 13 avril, 1791. 祭典の様子を Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 46-50.
- ⑯ 五月二十九日「ルーアンの愛国的婦人」一五〇〇 - 一八〇〇名が大聖堂においてマサを挙げるが、クラブは「自治体とともに参加している」。Hébert, "Entre politique et transcendance", p. 29. また六・八月にかいてマサ出席を要請されるケースも多い。 *PV des séances de SF*, pp. 48-50.
- ⑰ *Journal d'Horchole*, 15 septembre, 1791.
- ⑱ 拙稿「フランス革命期ルーアンの民衆協会」第一章参照。
- ⑲ *Journal d'Horchole*, 25 septembre, 1791.

第二章 クラブによる政治文化の闘争（一七九二年）

第一節 ルーアンにおける自由の木

ヴォヴェルによれば、九二年は新しい市民的象徴が祭典に現れ、民主化が始まる時期である。本章では、この時期のルーアンの祭典への、クラブの関与を中心に検討する。

とはいえ九二年においても、クラブの祭典への参加は相変わらず限定されている。それは、クラブによる祭典の開催請願が、九二年には一例もないこと、また祭典に団体として参加した例も稀（一例）であることから明らかである。それゆ

え革命祭典に対するクラブの態度は、九一年までと比して一見、変化が見られない。しかしクラブは二つの行動によって、公式の祭典に抵抗・介入する意思を示しはじめた。それが自由の木植樹およびクラブ内祭典の組織である。

中世以来、フランスでは春になると、民衆は豊穰などを祈り、木（五月と呼ばれる）を植樹する慣行があった。この慣行に、革命期に生まれた新生の希望が重ね合わされ、「自由の木」というシンボルが生まれる。このシンボルは九二年になって全国に普及し、六万本が植えられたというが、オルショールの日記によれば、ルーアンに自由の木がはじめて現れたのは、六月二一日の朝のことである。それは裁判所（旧高等法院）の中庭にたてられた大きなみの木であって、それには三種類の字句を書いたものが結われていた。枝葉は三色のリボンで飾られていたほか、木の頂には三色徽章が付けられた赤いボンネット帽が被せられていた。そして数日のうちに同様の木が市内の広場、フォール、兵舎などに次々と植えられたという^②。この自由の木は何の象徴であろうか。最初に木が植えられていたのは裁判所の中庭であったが、このとき市議会がこの建物の中で行われていたことを考えると、この植樹は穩健派市議会の政策に不満をもつ者の示威行為であろう。また六月二〇日、パリの民衆が議会ついで王宮に侵入し、国王に罵声を浴びせる事件が起きているが、ルーアンの穩健派市民は、これを非難する建白書を起草し、署名を集めてゆく^③。一方、これに對抗するように市内で植樹がすすめられてゆくことから、木は革命推進、攻撃のシンボルとして捉えられていたと思われる。では、不満をもつ者とは誰なのか。注意すべきは、最初の自由の木に被せられていたボンネット帽である。この帽子がそれまでルーアンで確認されているのは一度である。それは、九〇年六月の連盟祭の夜、クラブに置かれたあの装飾である。それゆえこれら一連の植樹は、クラブによってなされたと考えることができる^④。事実、クラブはこの革命のシンボルの普及に熱心であった。Journal de Rouen（九二年六月二六日）には、自由の木植樹のための寄付金を募るクラブの次のような訴えが掲載されている^⑤。

全ての自由の友への意見

いたるところでフランス人は自由の木を植えている。おそらく我らが同胞も、一刻も早くそれが市内に現れるのを見たいと望ん

でいるであろう。「中略」すなわち、我々が象徴としてとりあげるこの自由の木が、全ての人の財産とならんことを。ドウニエ貨「一二分の一スー」を差し出す寡婦から、金貨を提供する富裕な御仁までが、自発的に、飾られるべき祭典の高貴さと厳肅さのための費用を寄付してくれんことを。憲法の友は自由の木が七月一日に植樹されることを望む。彼らはその同胞に伝える。この市民祭典の費用を出そうという市民はオモン通り一二三番地においてそれをなすことができる。〔後略〕

そして七月一日、連盟祭記念祭（於シャン＝ド＝マルス）において、この寄付金によって購入された自由の木が祭壇に植樹された。やはりこの木にも、赤いボンネット帽が被せられ、枝葉に三色徽章とリボンとが結われている。また「国民」「法」「国王」「統一および友愛」と刻まれた、四つのメダルも吊り下げられていた。^⑤この祭典以後、自由の木は、ルーアンの革命祭典に欠かせない必須のシンボルになってゆく。

また七月一日、市議会がシャン＝ド＝マルスの自由の木を、裁判所中庭に植え替えるため掘り起こそうとした時、クラブの有力メンバーの一人ガマールに率いられた市民がこれに抗議するという騒動が起きている。このときには国民衛兵が出勤し、結局、木はそのまま据え置かれることになった。^⑦この事件はクラブが自ら寄付し植樹させた木を、行政の管理下には容易におかせないようにしていることを示している。さらに八月一日、クラブはデイストリクト議会に対して、自由の木に飾られたメダルの字句（「国王」）の変更を要求しており、^⑧クラブの自由の木に対する関心がきわめて高かったことを物語っている。

以上のように九二年、クラブは自由の木を革命の、また愛国派たる自らのシンボルとして、市民のあいだに普及させることに努めていたのである。そしてこの観念上の結びつきは、反革命勢力のあいだにも定着していった。時期はやや下るが、九三年一月に起きた王党派による国王助命嘆願デモ（デモがおきた広場の名をとりルージュマール事件と呼ばれる）のさいには、これに抗議するクラブのメンバー三名に暴行が加えられた後、広場にあった自由の木が放火されている。これに対し事件翌日には、市民によって自発的に植樹が行われ、さらに二〇日にも再植樹がなされている。また二月二〇日

には市議会で、市内における自由の木の新植樹が検討されたが、この植樹にもクラブは深く関わることになる。例えば、翌二日には、クラブの有力メンバーであるネウルが植樹用のポプラを寄附している。^⑩さらにこの植樹にかんする委員として任命されたのは、ネウル、ギュイエ、カレ、ロベール、イヴルネという五名の市会議員であるが、いずれもクラブの中心人物であった。^⑪そして彼らの指揮のもと、自由の木植樹は、義勇兵召集の式典と同時に開催することによって、三月一日、市民祭典として大々的に祝われたのである。^⑫このとき植樹された木の一本は、大聖堂前広場に植えられた。

また六月には、フェデリスム反乱勃発にさいしジロンド、モンターニュどちらの陣営に与するか、市議会やクラブにおいて激しい議論がなされたが、七日深夜には、大聖堂前広場にある自由の木がサーベルで斬りつけられるという事件が起きている。^⑬これは、この木を植えたクラブ勢力Ⅱモンターニュ派に対する保守派の圧力に他ならない。

以上のように、九二年、ルーアンのクラブは公式の祭典に参加していなかった。しかし一方で、自由の木という新しい革命のシンボルを普及させて、その保護者・愛国派としての自らの位置づけを明確にし、政治文化面での意思表明を始めたのである。さらにクラブは、より直接的に、公式の祭典に対抗する意思を示してゆく。その様子を次節で検討しよう。

第二節 四つのクラブ内「革命祭典」

本節では、自由の木植樹と並んで、九二年にクラブが展開した政治文化の闘争、市民祭典の組織を検討しよう。とはいえ、前節で確認したようにクラブは九二年、公式の革命祭典に参加すらしていない。ここで扱う市民祭典とは、クラブの議場内で行われたものである。この年、クラブは「旗の祭典」「シモノーの哀悼式典」「八月一〇日の革命における犠牲者の哀悼式典」「ボールペールの哀悼式典」という四つの祭典を行っている。この種の祭典開催は、公式の祭典を主宰する市議会等とのあいだに少なからず緊張を生んだことが予想されるが、一体どのような祭典が企画されたのだろうか。順をおって検討しよう。

旗の祭典は、九二年一月一七日に開催された。祭典の目的は植民地サン＝ドマングでの反乱鎮圧に英米両国が協力してくれたことに感謝し、「自由の兄弟」たる両国との友愛をいっそう深めることとなっている。祭典当日、英米仏の国旗が一束にして会議場の天井から吊るされ、ルーアン在住のイギリス・アメリカ人が招かれている。祭典の中心はクラブの議長、女性市民、三人のメンバー、そして国民衛兵士官による演説であり、これら演説の合間に革命歌「サ・イラ」の合唱や三色リボン、三色徽章、旗の贈呈が行われる。祭りは「サ・イラ」が歌われるほかは肅然と進行し、特に目新しい点はない。演説も三国を賞揚するか、兵士たちに規律を説く内容に終始している。しかし注目すべきは、この祭典に市議会のメンバーが招待されていないことである。実は、祭典開催が決められた一月一日、祭典に市議会メンバーを招待することとは動議されていた。ところがクラブのメンバーたちは、この提案を否決したのである。^⑤このことから、クラブは市議会の影響を排した、独自の祭典組織を模索していたことがわかる。

次に行われたのは、シモノーの哀悼式典（三月二十九日）である。彼はエタンブの元市長で、三月三日、穀物の価格統制を求める農民の要求を受け入れなかったため、殺害された人物である。パリの保守派は、彼を「法の擁護者」として祭典を行うのだが（六月）、ルーアンではこれよりも先に、クラブが独自に祭典を開催したのである。この祭りにおいては、ミラボーの哀悼式典のように、シモノーを称える演説が議長とメンバー一名によってなされ、葬送曲が奏でられる。議場内におかれた円柱には花が手向けられ、議会のデクレが装飾に使われている。また頂には糸杉の枝と月桂樹の冠（栄光の象徴）が飾られていたという。^⑥価格統制に反対して命を落としたシモノーを、「法の擁護者」として賞揚する姿勢は、クラブにおける主流派がまだジロンド派であったことを物語っている。しかし祭典のシンボルや進行にかんして、クラブの独自性は特に見られない。

八月一日の革命の犠牲者を悼む式典（八月三日）はどうだろうか。祭典装飾には、柏（英雄の象徴）と糸杉で飾られた冠が現れ、記念碑には花が手向けられる。音楽は葬送曲であり、演説（議長、書記、メンバー一名）も犠牲者を悼み賛美

する内容である。これらの点ではミラボーやシモノの哀悼式典と変わりない。しかし一方でこの祭典には、これまでに見られなかった特徴がある。例えば、議場内には死者の記念碑が置かれ、その前でクラブのメンバー、ついで一般市民による市民宣誓が行われている。祭典における一般市民による宣誓は、九〇年七月の連盟祭以来のことであり、このことは祭典の民主化をうかがわせる。^⑨さらに注目されるのが、新しいシンボルの登場である。例えばそれは「槍」であり、またその先に被せられたボンネット帽である。これがクラブのシンボルとして九〇年から見られたことは既に述べたが、軍隊が携行する武器としてでなく、装飾としての「槍」が祭典に現れたのは初めてであり、帽子も九二年七月の連盟祭記念祭につづいて二度目である。これら二つのシンボルは、以後、市内に定着してゆくことになるのだが、このことは自由の木と同様、クラブが新しいシンボルの導入と定着とを積極的に進めていることを物語っているように。

四つ目の祭典は、ボールペールの哀悼式典（二〇月一六日）である。ボールペールとは、ヴェルダンの戦いの司令官であった人物であるが、降伏を固辞して数日後、命を落としている。その死因が判然としなかったため、国内では反革命的陰謀ゆえの落命と考えられ、ルーアンのクラブは哀悼式典開催を決議したのである。この祭典でも追悼演説がなされ、円柱、槍、ボンネット帽といったシンボルが登場している。^⑩しかし注目すべきは愛国歌「ラ・マルセイエーズ」の導入である。数日前（二〇月二〇日）のクラブにおいて、議長に促された音楽家ルクトルがこの愛国歌を歌い、これにあわせメンバー全員が合唱するということがあった。これがルーアンで最初に「ラ・マルセイエーズ」が歌われた事例であるが、この日以後、クラブのほとんどの会議でこの歌か、別の愛国歌が歌われるようになっていた。^⑪「ラ・マルセイエーズ」がルーアンの公式の革命祭典において歌われるのは「サヴォワの人々を称える祭典」（二〇月二四日）^⑫であり、この点でもクラブは公式の祭典に先駆け、新しい政治文化を採用していたのである。

以上みたように、九二年の間にクラブでは四つの祭典が行われたが、それらは公式の祭典とややその性格を異にしている。旗の祭典では市議会が排除されているほか、八月一〇日の犠牲者を悼む式典では、一般市民による「宣誓」が復活し、

市内では一般化していなかった新たなシンボル（槍・ボンネット帽）が採用されている。またポールベールの哀悼式典では、「ラ・マルセイエーズ」が公式の革命祭典に先駆けて歌われている。さらには四つの祭典のうち三つまでがモチーフを革命の殉教者に求めているのも注目されよう。九三年夏以後、盛り上がりを見せる、革命の殉教者崇拜＝革命礼拝の萌芽もすでにクラブにおいては現れていたのである。

このようにクラブは九二年、公式の革命祭典には参加せずとも、新たなシンボルの導入や自前の市民祭典を通じ、政治文化の分野でも、市政を支配する穏健派に闘争を挑んでいたのである。そして九二年一二月の市議会選挙で、クラブのメンバーは市議会の三分の二を占めた。^② 影響力を拡大したクラブは、一二月に行われた「聖バルバラを称える祭典」以後、祭典行列に参加するようになる。この祭典では大聖堂でミサが行われる一方で、「カルマニヨール」「ラ・マルセイエーズ」が歌われている。^③ 革命祭典は過渡期にさしかかっていたのだが、公式の革命祭典の舞台に上がってきたクラブは、以後どのように影響力を拡大してゆくのか。九三年の様子を次章で検討しよう。

- ① Ozouf, *La fête révolutionnaire*, pp. 280-316.; Bianchi, *op.cit.*, pp. 74-76. オスーフの自由の木研究については、立川孝一「自由の木——フランス革命のサンボリスム——」『北海学園大学学術論集』四二、一九八二年、に簡潔にまとめられている。
- ② *Journal d'Horholla*, 21 juin, 1792.
- ③ G. Dubois, "Les intrigues contre-révolutionnaires à Rouen de juin à août 1792 et le projet d'évasion de Louis XVI", *AHRF*, 84, 1937.
- ④ ケネディによれば、九二年五月以降全国に広がった植樹祭の多くはクラブによる組織だった。Kennedy, *The Middle Years*, pp. 222-224.
- ⑤ *Journal de Rouen*, 26 juin, 1792.
- ⑥ *PV des séances de SP*, pp. 73-74.
- ⑦ *Journal d'Horholla*, 17 juillet, 1792.
- ⑧ *PV des séances de SP*, p. 81. 八月二八日の市議会において、字句を「自由・平等」に変更することを決定。九月一〇日に実施された。*AMR*, série Y3, 60-64. (九〇年八月二八日)
- ⑨ ルージュブール事件については、Mazauric, *Sur la Révolution française*, pp. 140-145. 再植樹など一連の議論を、*AMR*, série Y3, 241-244, 255-256. (九三年一月二二日および二〇日)
- ⑩ *AMR*, série Y3, 293-294. (九三年二月一〇日)
- ⑪ *AMR*, série Y3, 294-295. (九三年二月二日)
- ⑫ *AMR*, série Y4, 6-8, 8-10. (九三年三月五日および八日)
- ⑬ 祭典の様子は Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 70-71.
- ⑭ クラブの議論については、高橋暁生「フランス革命期ルーアン民衆協会の行動原理——地方における革命政治の実態——」『橋論叢』二二二

一七九九年二月、三五五-三六〇頁。

⑮ *Journal d'Horcaille*, 10 mars, 1793. の欄に記載。

⑯ 「旗の祭典」に関する議論「祭典の進行記録は」*PV des séances de SP*, pp. 56-57. マンリックはこの祭典について「ジロンド派を中心とするクラブのリーダーが、植民地情勢の沈静化、対大陸諸国との戦争の勝利のため、英米の中立を引き出すねらいがあったと指摘している」。

Mazauric, *Sur la Révolution française*, pp. 165-171.

⑰ ショーの哀悼式典について「*PV des séances de SP*, pp. 69-71.

第三章 クラブによる革命的文化変容（一七九三年）

第一節 革命祭典への参加と祭典組織

一七九三年は革命祭典に大きな変化が見られた転機のある年である。先行研究においては祭典参加者が民主化し、火刑や仮装行列などの民衆慣行の要素が復活するとされている。^① また非キリスト教化もこの時期の特徴の一つだが、このような祭典・政治文化の変化にかんしてクラブはどのような活動を展開したのだろうか。

祭典への参加という点では、九三年にルーアンで開催された七つの祭典のうち六つにクラブは参加している。このうち五つの祭典で祭典行列が行われ、その全てにクラブは、行政・司法・軍事の諸機関とともに加わっている。このことにはクラブの勢力が市議会において伸張したことに加え、市公教育委員会が組織されたことが関係しているだろう。九三年二月一九日に設置されたこの委員会は、常設ではなく祭典が企画されたときに召集されたが、これを構成したのは、弁護士、ピロンやカレ、薬剤師アルヴェール、役者のベラルといったクラブのメンバー六名だったのである。^② しかしこれらの委員以外の者が祭典組織にかかわることも珍しくなかった。先の自由の木植樹祭がそうであったし、七月の憲法承

⑱ 八月一日の犠牲者の哀悼式典について *ibid.*, pp. 82-87. また Hébert, "Entre politique et transcendence", p. 57-61.

⑲ ホールベールの哀悼式典について「*PV des séances de SP*, pp. 94, 97.

⑳ *ibid.*, pp. 19-20.

㉑ Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 65-67.

㉒ 拙稿「フランス革命期ルーアンの民衆協会」一一-一三頁。

㉓ Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 67-68.

認宣言祭典のプログラムを作成したのも、ピロンと、やはりクラブ急進派メンバーの建築家ラミーヌだった。^③このように九三年になると、常任・非常任を問わず、祭典組織委員を、ジャコバン急進派が占めるようになったことがわかる。

またクラブと祭典との関係で注目されるものに、祭典の開催請願がある。九三年の祭典のなかには、クラブの請願により組織されたものが三例（ルベルティエの哀悼式典、ボルディエとジュールダンの記憶のための市民祭典、理性の祭典）あり、これらにはクラブの意向が大きく反映されたと思われる。このように九三年の祭典は、クラブの意向を受けた委員によって組織されたり、クラブ自身の請願によって開催されたりしている。以下では、クラブが開催を請願した三つの祭典のうち、秋に行われた二例を検討し、祭典の具体的な展開と、政治文化の領域におけるクラブの影響力を考察することにしよう。^④

最初に取り上げるのは、共和二年フリメール三日（九三年二月三日）の「ボルディエとジュールダンの記憶のための市民祭典」である。ボルディエとジュールダンは、八九年八月にルーアンで起きた食糧蜂起の首謀者である。彼らの処遇についてはバリから慎重を期す旨の通知があったにもかかわらず、社会的恐怖に駆られた当局は彼らを逮捕・処刑してしまっ^⑤た。いわばボルディエとジュールダンは、ルーアン独自の「自由の殉教者」といえよう。そこで彼らの「復権」をはかり、顕彰する祭典の計画が、フリメール一日（二月二日）のクラブにおいて持ち上がり、組織委員としてリビエ（共和国劇場の劇場主兼役者）とロモニエ（医師）の二人が任命された。祭典の準備は彼らと市議会のあいだで協力して進められている。またクラブにおいては、殉教者一名の胸像作製、彼らの裁判記録調査、ボルディエらを裁いた裁判官の祭典出席が決定された。^⑥

では祭典の様子を検討しよう。表2は、この祭典の進行をまとめたものである。祭典は、正午、祭典行列から始まる。行列参加者のなかで注目されるのは、行政機関を取り囲む女優たち、そしてセクシオン代表に扮する俳優たちだろう。これはリビエの意向であろうが、ボルディエ自身が役者であったことも関係していよう。この祭典行列を見てオルシヨルは「まるで仮装行列のようだ」と不満を露わにしている。^⑦行列は、一時半、セーヌ川にかかる橋の上の祭壇に到着する。こ

表2 ボルディエとジュールダンの記憶のための市民祭典（共和2年フリメール3日／93年11月23日）

〔祭典行列〕

・各機関は市庁舎に集合。順：憲兵隊半数／鼓笛隊／布に包まれた箱を持つ市民／初等学校教師と子供／楽団と劇団（陰鬱な音楽）／派遣議員／行政・司法機関。周囲を女優（白服、バラの花冠、三色帯）が囲んで進む。そのうちの4人のサン＝キュロットが2人の骨壺をもつ／クラブ／26人の第一次集会代表（役者）／残りの憲兵隊→港に到着

〔殉教者の復権セレモニー〕

- ・憲法上の各機関、招待された市民が祭壇周囲に整列
- ・市議会決議の読上げ
- ・演説（順）：市長ドゥフォントネー／リビエ／臨時行政委員サン＝タマン／派遣議員／ロモニエ
- ・劇場の俳優・女優が愛国歌斉唱→市民の合唱
- ・4時、行列は市庁舎へ出発。「ラ・マルセイエーズ」「モンターニュ派讃歌」など合唱

〔大聖堂〕

- ・帰途、大聖堂へ。派遣議員、サン＝タマンの演説

（祭壇の様子）

祭壇の傍らにオーケストラ／香／祭壇4隅の字句「自由の殉教者ボルディエとジュールダン」「愛国者は不滅だ」「汝らは我々の心のなかに生きている」「汝らの霊の仇はうたれる」／祭壇上には2人のミイラ化した頭部が置かれる（壺の中身）
軍を除き、市民は皆ボンネット帽をかぶる／献花・糸杉の枝が捧げられる

出典 Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 76-83.; *Journal d'Horcholle*, 23 novembre, 1793.

こは二人の死体が吊るされた場所である。そして祭典は五人の人物の演説へと移ってゆく。祭典の舞台装置で目をひくのは、祭壇に置かれた「聖遺物」、二人のミイラ化した頭部である^⑧。祭典に遺骸が使われるのは、九三年一月にパリで行われたルペルティエの哀悼式典（遺骸）や、九三年八月のマラーを称える祭典（心臓）を想起させるが^⑨、これは祭典参加者や民衆に自由の殉教者について強烈なイメージを残したであろう。また祭典にさいし、殉教者二人の名を河岸につけること、祭典の記念碑の建立という市議会の決定が読み上げられた。

しかしこの祭典には、単なる殉教者崇拜以上の意味もみてとれる。例えば、殉教者二人の名を彼らの処刑された河岸につけることや記念碑の建立は、旧体制とむすびついた空間の「浄化」と、その永遠性を祈願するものと考えられよう。また祭典と関連して、前夜、市門におかれていた見張り小屋が破壊されている。これは八九年にボルディエらが放火したものを再建したものであり、ルーアン市における旧体制の象徴であった^⑩。さらに祭典における演説の内容を検討してみると、当時の市政の責

任を追求することに程度の差はあれども、どれも過去の過ちを指摘し反省する内容となっている。^⑪すなわちこの祭典は、「殉教者を死なせた」ルーアン市全体の贖罪、旧体制のルーアンとの決別を志向しているのである。しかもこうした「死と再生」のテーマは、旧体制の終焉という抽象的な次元だけではなく、ルーアンの実際の政治状況にも対応するものだった。実は、この祭典は最初から、革命勃発以来市政を掌握してきた穏健派に対する、クラブによる政治的圧力として、計画されたのである。

このことを理解するには、祭典組織の経緯をやや詳しく見る必要がある。後述するように、当時、クラブは別の「自由の殉教者の祭典」開催を控えており、それ以外の祭典計画はなかった。それどころかボルディエとジュールダンを「殉教者」として崇拜するような議論は、それまで全くなされていなかったのである。一方で、この頃、市内の食糧不足問題を解決するためクラブの代表二名が、パリのジャコバン＝クラブを訪れていた。そしてブリュメール二六日（十一月一六日）、彼らは窮状を訴えたのだが、逆にパリのクラブのメンバーたちは代表に対して、ルーアン市の穏健的な性格や、市長がもと立憲議会議員、県議会議長で保守派のドウフォントネーであることを詰問、叱責したのである。そして、そのうちの一人ルニユが、ルーアンを革命化する策の一つとして、「ボルディエとジュールダンの記憶にオマージュを捧げること」を挙げ、聴衆の喝采を浴びたのだった。^⑫「忘れられた殉教者」は、四年たつてパリのジャコバンによって発見されたのである。一方、ルーアンに帰った代表二名は、パリのルーアン不信を報告し、クラブは食糧問題解決のために、市長更迭を含めた打開策を検討した。そしてフリメール一日、急遽、「ボルディエとジュールダンの祭典」が計画されたのである。^⑬

確かに八九年当時、ドウフォントネーが食糧蜂起とパリの対応、そしてルーアンの有力者の意向について知らなかったはずはない。また彼は「殉教者」の裁判結果についても容認していたし、事実、祭典において当時の市政の責任をあいまいにした穏健的な演説を行っている。結局、フリメール六日（十一月二六日）彼は辞任に迫りこまれ、さらに投獄されてしまう。そして後任には急進派ピロンが就くことになった。このようにこの祭典は、ジャコバン派による市政掌握への布

表3 理性の祭典（共和2年フリメール10日／93年11月30日）

〔祭典行列〕12時半、市庁舎を出発。順：騎兵憲兵とルーアンの兵士、1隊10人ごとのグループ（それぞれに旗をもつ）／士官と隊長／少年と教授・教師（先頭は「共和国の希望」とかかれた旗）／老兵／兵士100人／少女（月桂樹の枝が描かれた旗。字句は「これがあなた達の報酬です」）／クラブ（旗の字句は「我々は暴君どもの恐怖である」）／軍の楽団／「自由」（サン＝キュロットの運ぶかごに乗る。古代風の衣装を着た若い女性を取り囲む）／共和国の敵国の旗とゆりの花文様が描かれた旗／派遣議員および首長をのぞいた行政機関／8人の鼓手／「平等」（サン＝キュロットが運ぶ大楯の上におかれた柏の玉座に座り、白服の女性たちが囲む）／憲法上の機関の首長3人（ディストリクト、県、裁判所）／市役人筆頭ピロン、国民衛兵古参、26セクションの委員／憲兵隊と国民衛兵／（前後に多くの市民を従える）

《ルージュマール広場》

〔火刑〕ゆりの花のタビスリー、国王の肖像、封建制・聖職者の称号のつくもの、十字特許状、その他圧制や王国を象徴するもの

〔自由の木植樹〕市長ピロンの演説…広場の名称変更（革命広場）／民衆のダンス

《シャン＝ド＝マルス》

〔宣誓〕派遣議員、サン＝タマン、行政関係者が「山」にのぼり宣誓／市民による復唱／香／鳩を放す

〔火刑〕フランス軍のゆりの花文様の旗、敵国の旗

・サン＝タマンの演説。祝砲／ダンス

*この間、市東部のサン＝カトリーヌの丘にオペリスクが立てられる

《「理性の神殿」（大聖堂）》

・「真理の火」点火／「ラ・マルセイエーズ」など演奏

・演説 ピロン…「理性の神殿」に名称変更／派遣議員アルキエ／元司祭デュラン…聖職放棄までの経緯説明

《新市場広場》

〔自由の殉教者像除幕式〕

・広場の中心の泉のオペリスクの4隅に配置／オペリスクの頂には三色旗とボンネット帽

・演説 ピロン…広場の名称変更（モンターニュ広場）／県会議長ブーヴェ…自由の殉教者、モンターニュ派礼賛

・オーケストラの演奏（「自由への奉納」）

出典 Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, pp. 83-97.

石となった。すなわち「殉教者」たちは、クラブのメンバーとともに、反革命的な事件の記憶を抹消し、「再生」の新たな記憶を生み出すのに一役買った。そしてパリに、「罪を贖った」革命的なルーアンの姿をアピールするとともに、自らを死に追いやった稳健派の失脚にも貢献したのである。その一週間後に行われた理性の祭典もクラブが開催を請願し、行われた祭典である（フリメール一〇日／十一月三〇日）。この祭典は、それぞれスベクタクルが用意された

四つの舞台から構成されているが、その特徴を表3にしたがって整理してみよう。この祭典の特徴としてまず注目されるのは、祭典参加者の民主化・多様化であろう。それは行列の構成にはつきりと現れている。兵士、楽団、行政・司法機関、派遣議員といったなじみの面々のほかに、セクションの代表、クラブ、少年と教師、少女、さらに市民の幅広い参加が見られる。次に祭典の非キリスト教化が挙げられよう。行列には「自由」「平等」を体現した女性の姿がある。「自由」「平等」にそれぞれ扮するのは、リビエの妻と、カフェの女性店員であるが、このうち「自由」は右手に、ボンネット帽を被せた槍を携えている。祭典の主会場の一つ、理性の神殿（旧大聖堂）においては、「自由」が祭壇に登り、「真理の火」を点火する。背後に流れるのは、共和国のテ・デウム「ラ・マルセイエーズ」そして「ルーアン市民讃歌」である。そして祭典の最後は、「自由の殉教者」崇拜で締めくくられる。新市場広場におけるマラー、ルペルティエ、ボールペール、ボーヴェ^⑭の胸像の除幕式と彼らへの称賛は、キリスト教に代わって「革命礼拝」が一定の盛り上がりをもせていたことを示している。最後に流れる「自由への奉納」は「ラ・マルセイエーズ」と「国境の警備にあたらう」という二曲を組み合わせた革命歌である。

この祭典においても、注目されるのは「死と再生」のテーマであろう。このテーマは、しばしば民衆慣行のかたちをとって、祭典に登場する。行列中に見られるフランスの敵国の旗、ゆりの花文様が描かれた旗、また市民によって供出された「封建制の残滓」^⑮、これらはそれぞれシャン・ド・マルスとルー・ジュマル広場で、火刑によって燃やされる。旧制度の「死」を象徴しているが、あわせて「再生」の儀礼も行われる。非キリスト教化にかんしていえば、まず大聖堂から「理性の神殿」への名称変更が見られる。この名称変更は非キリスト教化運動の一環として全国的にひろく見られる現象である。また新市場広場への自由の殉教者像設置と名称変更も、その一環と考えることができる。というのも、この措置は、新市場広場と対をなす旧市場広場の存在を多分に意識したものだからである。旧市場広場こそはジャンヌ・ダルクが火刑にあった殉教の地とされており、大聖堂と並んで司教座都市ルーアンの中心でもあった。それゆえ、後述するように、

クラブのメンバーたちも当初、旧市場広場に殉教者像を設置することを求めていた。この要求は容れられなかったのだが、以上を踏まえると、胸像設置と名称変更という措置には、旧市場広場のもつ宗教的な重要性を相対的に低下させ、またルーアンに伴う殉教者の記憶を、聖処女から自由の殉教者へとスライドさせる意図が含まれていたと考えられよう。

しかし一方で、キリスト教と直接には関係ないルージュマール広場の名称変更と、自由の木植樹もなされている。この広場は王党派によるデモ行為が行われた場所であり、ルーアン市民、とりわけジャコバンにとって反革命的な記憶を残す場であった。それゆえこうした措置は、ルーアンの負の過去を清算し、空間の再生を試みるものと考えられる。以上のようには理性の祭典は全体を通してみると、市内の「再生」がまず志向されていて、そのなかに「理性崇拜」が組み込まれているように見える。換言すれば、「理性」はあまり強調されていないのだが、これは祭典を組織したクラブの意図を大きく反映するものだった。

そもそもこの祭典の組織を請願したクラブにとって、当初の目的は理性崇拜ではなかった。ブリュメール二日（二〇月二三日）クラブにおいて、この祭典にかんする最初の議論がなされたとき、祭典のテーマは「マラーとボーヴェの哀悼式典」だったのである。^⑮ 同二三日（十一月三日）に、再び祭典計画について報告がなされたときも、テーマは「自由の殉教者」であった。^⑯ このとき祭典開催は、同二〇日（同二〇日）に予定されていた。クラブによる請願をうけて、同二四日（同一四日）、市議会は祭典計画を検討する委員（ベラルとバルバレー。クラブからはリビエなど三名）を任命し、^⑰ 二五日（同一五日）には祭典開催と招待者にかんする決定を下している。^⑱ ところが、準備期間が不足しているために、二六日（同一六日）、市議会は、祭典開催をブリュメール一〇日に延期することを決定した。^⑲

この延期のあいだに、どのような事態が市内で起きたのだろうか。まず、市議会においてブリュメール二六日、一市民がルージュマール広場における自由の木の再植樹を請願している。^⑳ さらにバリにおける聖職放棄や「理性の祭典」開催をうけ、キリスト教攻撃の演説がなされるようになり、二六日以降は、連日、聖職者による聖職放棄の宣誓がなされた。祭

典において聖職放棄の経緯を説明するデュランも、このときに棄教している。さらに市議会は教会の銀器供出を始めた（後述）。一方、「自由の殉教者の祭典」延期を了承したはずのクラブも、急いで「ボルディエとジュールダンの祭典」を開催させ、市長を辞職に追い込むなど、市内において非キリスト教化、穏健派一掃のムードが急激に高まってきたのである。こうして、「自由の殉教者の祭典」は、祭典の規模を拡大して「理性の祭典」として開催されることになった。しかしクラブの要求した「殉教者崇拜」は削除されなかった。また「ボルディエとジュールダンの祭典」の結果、ピロンを長として再出発することになった市議会は、この祭典を「革命化した」ルーアンの第一歩として内外にアピールする必要性に迫られた。ルージュマール広場の再生は格好のテーマに映ったことであろう。こうして「理性の祭典」では、理性崇拜と、クラブが推進してきた「自由の殉教者」崇拜、そして穏健派の記憶の一掃という三つの主題が、同時に祝賀されることになったのである。

以上みたように、九三年秋に行われた祭典には、祭典参加者の民主化と多様化、非キリスト教化、そして火刑のような民衆慣行の復活が見られる。そして祭典が本来有する「死と再生」のテーマがはっきりと示されており、祭典の分析については、ヴォヴェルの指摘がルーアンにもあてはまるといえよう。しかし祭典の構成については、ルーアン市の政治情勢と関連づけて理解される必要がある。「死と再生」のテーマは、王政にかわる共和政への市民の希望や、キリスト教に代わる革命礼拝の浸透のみを示していたわけではない。それは祭典を組織したクラブ勢力が、穏健派に突きつけた現実の圧力でもあったのである。そしてそれは、九三年秋にルーアン市の置かれていた複雑な政治状況（バリの不信、食糧不足、市内における穏健派と急進派の抗争）に大きく影響されたのである。

また九三年にクラブがこうした革命祭典の組織や運営、そして参加を通して、政治文化の闘争に大きく関わり、主導権を握りつつあることも明らかになった。さらにクラブが組織した祭典はみな、本来は革命の殉教者をモチーフにしたものであったことも注目される（ルベルティエ、ボルディエとジュールダン、四人の自由の殉教者）。九二年にクラブ内で行われてい

た「殉教者」崇拜は、おなじくクラブが普及に努めてきた様々なシンボルとともに、ルーアンの公式な革命祭典の中核に位置するものとなったのである。

第二節 象徴をめぐる闘争と「公教育」

あらゆる事物が政治化したフランス革命期にあつては、革命祭典や新しい象徴の普及自体が市民教育、「習俗の革命」の一環であつた。九三年秋以降、こうした「教育」論議は議会においていつそう盛んになり、クラブの議論や祭典をも「教育」に含めることを明記したブキエ案の成立にいたる。また九三年十一月、非キリスト教化運動の激化を目にしたパリの公安委員会は、地方クラブに「新しい教育の教師」たることを期待した回状を送付している。事実、ルーアンのクラブは祭典の組織・運営を通じ、共和主義的モラルを市民に刷り込んでゆく「公教育の指導者」となっていたが、祭典以外にはどのような活動を展開したのだろうか。まず封建制・君主制・キリスト教といった旧制度の象徴に対してクラブがとつた行動を検討してみよう。これらに対してクラブは九二年秋以降、攻撃的な態度を見せはじめていたが、それが本格化するのは九三年夏以降である。

例えば、八月三日、市議会は、封建制の記念碑、証書、象徴の破壊に関する委員（ラミースとロベール）を任命し、二八日には市役所の中庭で「火刑」が行われている。このときに燃やされたのは、年金や封建的特権にかんする証書類である。このように火刑は、革命祭典でなくとも行われており、九三年における民衆慣行の復活を強く印象づける。そして、こうした火刑はクラブにおいても行われている。ヴァンデミエール八日（九月二九日）には、クラブの設置された教会の中庭で、枢機卿・大司教・元女王の大紋章その他、また「迷信の玩具」が燃やされている。フリメール二二日（二月二日）にはメンバーの一人が、信心家の家で見つけた二通の教皇書簡と王党派聖職者のキュロットをクラブに提出したが、これですぐさま、「共和国万歳」の声がひびくなか、焼却された。

また教会の銀器供出についてもクラブは積極的に関与している。銀器供出は九三年から九四年にかけて、全国で断続的に見られた非キリスト教化運動の一つである。ルーアンにおいてこの動きは、九三年一月末、先の二つの祭典開催の時期に始まる。フリメール七日（二月二七日）、クラブを市議会代表が訪れ、市議会が教会や個人の建物から、あらゆる狂信主義の玩具を取り除かせたこと、全教会の銀器を国民公会に送ることを決定したと報告した。その上でこれらのパリへの輸送に随行する三〇人のサン＝キュロットをクラブが任命することを求めたのだが、クラブはこれを快諾している。結局、随行するのは市議会代表三名、クラブ代表二名となるのだが、銀器供出について市議会とクラブが協力していることが理解されよう。^④

マゾリックによれば、宗教戦争のときほどではないにしろ、ルーアンにおいても聖像破壊運動は行われた。とりわけクラブの関与ということで注目されるのは、ジャンヌ＝ダルク像の破壊要求である。まずブリュメール四日（二月二五日）、クラブにおいて、旧市場広場のジャンヌ＝ダルクの胸像を壊すこと、代わりにマラーとボーヴェの像を設置することが求められている。同日には「聖ルイが、サン＝トウアン教会と大聖堂の門の上にいる」という非難も出されている。ルーアンにおける教会建築の破壊が議論された最初の例である。これらの要求は請願書としてまとめられ市議会に提出されたが、回答が示されなかったもので、同一八日（二月八日）、クラブは重ねて請願している。このときには旧市場広場にマラーとボーヴェに加え、ルベルティエの像も据えることを要求している。これに対し、市議会は同日ジャンヌ像を飾るゆりの花の装飾のみを壊すことを決定しているが、クラブはこれに満足せず、同三日（同二三日）、ジャンヌ像の取り壊しの遅れについて質問を寄せている。結局ジャンヌ像自体は残ったようであるが、新市場広場に自由の殉教者のモニュメント四体が置かれるのは前述したとおりである。このように九三年秋以降、クラブは革命祭典以外にも、火刑や銀器供出そして自由の殉教者像の設置など、様々な機会をとらえ、政治文化の革命や非キリスト教化の推進に貢献していたのである。

クラブの「教育」活動はさらに多岐にわたっている。例えば、国民徽章購入のための募金活動（ヴァンデミエール二日／

九月二三日^⑤や、メンバーの自宅や国有建築物を市民的碑文と三色旗によって裝飾することを決議している（同八日／九月二九日^⑥）ほか、「自由の像」作成と広場への設置にかんする議論も行っている（同二六日／一〇月一七日^⑦）。またクラブは、ブリュメール一八日、市議会において、デカディゴとの市民祭典の開催を求める請願書を読み上げている^⑧。フリメール一六日（二月六日）にも同様の要求を出しているが、このときには道徳的演説をおこなう演説者をクラブと市議会の双方から出すことなどが議論された^⑨。このことはデカディを市民教育、とくに道徳教育の一環として認識している様子をうかがわせる。

演劇・劇場との関係も変化してゆく。革命初期にもクラブが演劇にかんする議論を展開することはあったが、それらへの介入が本格的になるのは、やはり九三年秋以降である。例えば、ヴァンデミエール二七日（一〇月一八日）には、デカディ毎に愛国劇を上演するように劇場主に促すことを求め国民公会に請願書を送っているし、それより以前の、同八日にも、メンバー六人からなる委員会が、演劇の内容に関して、「共和国民が公言すべき雰囲気の純粋性を傷つけていないか」検閲することを定めている^⑩。同三〇日（一〇月二二日）のクラブでは、グラン・スペクタクル座の音楽家たちが、非市民的・不名誉な発言をしたとして非難されており、劇場主でありクラブのメンバーでもあるカブースに調査を要求しているこれに対し、ブリュメール八日（一〇月二九日）、彼は劇団員全員に愛国的歌曲を演奏させるよう約束する旨の手紙を送ってきている^⑪。また市内の二大劇場の劇場主（リビエとカブース）は愛国劇を上演するさい、しばしば事前にクラブに通知している^⑫。こうしたやりとりは、クラブが市内における、興行の事実上の管理者になったことを示している。

以上のように、九三年以降、革命祭典の組織、革命的シンボルの普及、デカディや演劇までも含んだ「公教育」の展開にクラブは大きく関与していた。九三年秋以降、クラブはルーアンにおける政治文化の革命の推進者となっており、市民とバリの革命家をつなぐ文化的仲介者の役割を担っていたのである。そしてこうした傾向は、共和二年ニヴォーズ一二日（九四年一月一日）、市公教育委員会の組織に結実する。

前述したとおり、市公教育委員会は九三年二月一九日に設置されており、クラブのモンターニュ派六名から構成されていたが、常設ではなかった。共和二年ブリュメール一三日（二月三日）にも、市議会は公教育委員を三名任命しているが、同様である。^④これに対し、クラブでは独自に、ニヴォーズ八日（二月二七日）、教育監視を担当する五名のメンバーが選出された。彼らの任務は、教師志望者の審査と、教育に携わる全ての者からアリストクラシー、穩健主義を排除することとされた。^⑤

そして同一二日、ルーアン市議会は新たに市公教育委員会を組織した。「芸術および祭典委員会」という別名が示すとおり、この委員会が、以後、祭典や教育に関するパリのデクレの実行、教師志望者の審査、祭典参加者の召集、祭典プログラム在市議会への提出と掲示、祭典議事録の作成、そして国民公会およびパリのジャコパン＝クラブへの送付といった任務を負うことになる。^⑥当初のメンバーはベラル、ラミーヌといったクラブ急進派六人だけであったが、のちに役者ヴェルノン、*Journal de Rouen* 編者のノエル、カブース、美術学校教授ルカルパンティエといった人々が補充されることになった。おりしもこの委員会が設置された翌日、派遣議員とクラブの主導により市議会が改組され、ピロンを市長とする急進派市議会が成立した。クラブ独裁は、行政・文化の両面で完成を迎え、ルーアンにおける恐怖政治と「習俗の革命」が、いよいよ軌道にのつたのである。

① *Vovelle, op.cit.*, pp. 122-133.

② *AMR, série Y3, 292-293.*（九三年二月一九日）メンバーは、ピロ
ン、ロベール、エルブヴィル、ベラル、アルヴェール、カレの六名。

③ *AMR, série Y4, 170-171.*（九三年七月一日）

④ 二月に行われた「ルベルティエの哀悼式典」は、国王処刑に賛成票を投じたため暗殺された国民公会議員を悼む祭典である。旧「オラトリオの父」教会で執り行われた。昼間であったが、窓を覆い松明を焚いて、あたかも夜であるかのような演出がなされた。式典は三日間に

わたり、それぞれ演説と酒の奉納、そして「ラ・マルセイーズ」の演奏がなされた。この祭典には行政・司法各機関の代表がそろって訪れたという。Chardon (éd.), *Dix ans de Fêtes nationales*, p. 69; *PV des séances de SP*, p. 108.

⑤ *Mazauric, Jacobinisme et Révolution*, pp. 165-168.

⑥ 祭典の計画・準備については *PV des séances de SP*, p. 174-175.

⑦ *Journal d'Hercholle*, 23 novembre, 1793.

⑧ これはロモニエが作成し保管していたものだが、八九年当時は騒擾

の首謀者であり犯罪者とみなされた彼らの、ミイラの作成理由や保存理由などは不明である。

- ⑥ バリにおけるマラー崇拜を始め、革命の殉教者崇拜にかんしては A. Soboul, "Sentiment religieux et cultes populaires pendant la Révolution: saintes patriotes et martyrs de la liberté", *AMRF*, 148, 1957.

- ⑩ *Journal d'Horcholle*, 24 novembre, 1793.

- ⑪ Mazauric, *Jacobinisme et Révolution*, pp. 173-190.

- ⑫ A. Aulard (ed.), *La société des Jacobins*, tome. 5, Paris, 1889-97, pp. 519-521.

- ⑬ *PV des séances de SP*, p. 173.

- ⑭ ホーヴェ・Beauvais は、九三年八月、トゥーロンに派遣された国民公会議員である。イギリス軍によって殺されたと思われたが、実際は投獄されていた（九三年十一月に解放）。

- ⑮ 祭典の二日前、市議会は市民に、火刑を行うため、封建制の痕跡を「しめす物や書類などの供出を求め、揭示を出して」了。 *Journal d'Horcholle*, 29 novembre, 1793.

- ⑯ *PV des séances de SP*, pp. 156-157.

- ⑰ Hébert, "Entre politique et transcendence", *Annexe*, XXI

- ⑱ *AMR*, série Y5, 64-66. (共和二年ブリュメール二四日)

- ⑲ *AMR*, série Y5, 66-69. (共和二年ブリュメール二五日)

- ⑳ *AMR*, série Y5, 69-70. (共和二年ブリュメール二六日)

- ㉑ *ibid*

- ㉒ *AMR*, série Y5, 69-92.

- ㉓ 松浦義弘、前掲論文、六二一-六八頁。

- ㉔ 谷川稔訳、河野健二編『資料フランス革命』岩波書店、一九八九年、

四七一-四七二頁。

- ㉕ クラブは九二年夏より、君主制・封建制に対する攻撃的な姿勢を示しはじめる。例えば、一月一日には、裁判所にある諸国王像の完全撤去を要求。また大聖堂内陣の王座がキリスト教の説く平等を侮辱しているため破壊すべきだ、という批判がなされた（一月二四・二五日）。 *PV des séances de SP*, pp. 99, 101. また九三年五月三日の会議では、封建制の諸シンボルを廃すこと、国民衛兵の服装（「国王」の字句が刻まれたボタン着用）の変更を市議会に請願することを決定。 *ibid*, p. 125.

- ㉖ *AMR*, série Y4, 332-334. (九三年八月二八日) 八月一日のデクレ第六条に従ったもの。

- ㉗ *PV des séances de SP*, p. 146.

- ㉘ *ibid*, p. 189.

- ㉙ 銀器供出については、ヴォヴェル『フランス革命と教会』六三-六四、九三-九六頁。

- ㉚ *PV des séances de SP*, pp. 179-183.

- ㉛ Mazauric, "Rouen et la Révolution", in: M. Mollat (ed.), *Histoire de Rouen*, Toulouse, 1979, p. 296.

- ㉜ *PV des séances de SP*, pp. 157-158.

- ㉝ *ibid*, p. 166; *AMR*, série Y5, 50-52 (共和二年ブリュメール一八日).

- ㉞ *PV des séances de SP*, p. 170.

- ㉟ Hébert, "Entre politique et transcendence", *annexe*, XX.

- ㊱ *PV des séances de SP*, pp. 145-146. この要求をうけて市議会は、共和二年ヴァンデシエール一八日に次のような揭示を市内に出した。「共和国民の心に、自由の偉大な諸原理を広め保つために、熱意ある

市民は各家に以下を掲示することを定める。共和国の統一と不可分、自由、平等、友愛、（よめなくば死） AMR, série U, 1285-4, «affiche civique, délibération du conseil général de la commune de Rouen, séance du huitième jour de la deuxième décade du premier mois l'an second».

③⑦ PV des séances de SP, p. 186. クラブは二月七日、自由の像を設置すること、資金は市民の寄付で賄うことを決定しており、早速、一市民がこの日三〇スーを寄付している。

③⑧ AMR, série Y5, 50-52. (共和二年ブリュメール一八日)

③⑨ PV des séances de SP, p. 185. テカディュに市民祭典を開くこと、そのために市自治体が従事すること、劇場主に音楽家を派遣するよう促すことなども要求。

④② *ibid.*, p. 154.

④③ *ibid.*, p. 146.

おわりに

最後にこれまで検討してきたことを整理しておこう。まず地方における革命祭典の実態については、これまでの祭典研究の指摘がルーアンにおいても妥当するといえよう。一七九〇年の連盟祭においては、キリスト教的また軍事的色彩が顕著であり、祭典参加者から民衆は排除されている。またミラボーの哀悼式典も行列とミサから構成されており、九〇年から九一年にかけての革命祭典は、旧制度下の祭典との連続性が見られる。九二年になると、祭典には自由の木や「ラ・マルセイーズ」などの新しいシンボルや儀礼が登場するようになるが、祭典の様相が大きく変わるのは九三年である。まず祭典組織のイニシアティブをクラブが握るようになった。そしてボルディエとジュールダンの復権祭典や理性の祭典に見

④④ *ibid.*, pp. 156, 159.

④⑤ *ibid.*, pp. 154, 157, 172, 197. 例えば、一〇月一八日には、リビエが翌日から「マティシェヌ親父と禁域の犠牲者たち」を、また二四日には、戦争が続く限り、六種類の劇を上演すること（十六つの劇のうち戦費調達のため、他の三つは寡婦や孤児への義援金のため）を通知している。一月一八日には、「諸王の最後の審判」を上演すること、また今後、愛国劇しか上演しないと発言し、さらに二月二六日には、カブリスとリビエが翌日、トゥーロンの戦死者とその遺児のために劇を上演することを通知している。また P. Manneville, «Les fêtes de la révolution et la vie théâtrale à Rouen et au Havre», *Annales de Normandie*, 46-1, 1996.

④⑥ AMR, série Y5, 39-43. (ブリュメール一三日)

④⑦ PV des séances de SP, p. 197.

④⑧ AMR, série Y5, 138-140. (ニヴョーズ二二日)

られるように、聖職者の姿が消え、祭典の非キリスト教化が進行する。また祭典参加者が民主化し、幅広い市民が参加するようになっていく。さらに、民衆慣行の火刑や空間の「浄化」である名称変更などのかたちをとって、「死と再生」のテーマが現れている。

しかし九三年秋のルーアンにおける二つの祭典において、このテーマはフランスの死（旧制度）と再生（革命）を抽象的に示していただけではない。例えばボルディエとジュールダンの祭典は、パリの外庄によって組織されたが、それは地方の革命化を推進するパリの中央集権政策、それに追従せざるを得ないルーアンの食糧行政上の位置、そして市内における穏健派とクラブ勢力の対立という状況を反映していた。それゆえ祭典では、「死と再生」は、クラブ勢力による穏健派勢力の打倒という、現実の政治関係とのアナロジーをもつて、祝われたのである。同様に理性の祭典もルーアン市の置かれた政治状況と密接に関係していた。それは、パリにおける理性の祭典のように、秩序の破壊を志向する祭典にはなりえなかった。なぜなら当時のルーアンでは、破壊や「死」よりも、「再生」に重きが置かれており、祭典も諸要素を交えて構成しなおされたからである。このように中央から発信された政治文化は、地方の事情で様々に読みかえられ、その意味を微妙にずらされてゆく。それゆえ革命祭典の分析を進めるにあたっては、「祭り自体」の意味を捉えることと同時に、当地の政治情勢との関連をあわせて検討せねばならないといえるだろう。

次にこれら革命祭典とクラブの活動、戦略との関わりであるが、これは革命の進行とともに大きく変化した。革命初期、クラブは連盟祭をはじめとする革命祭典の開催をいくつか請願しているが、祭典にはほとんど参加していない。しかしクラブは九二年以降、政治文化の闘争を本格的に展開する。クラブは自由の木植樹を進めることによって、このシンボルを革命の、また自らのシンボルとして定着させてゆく。その一方でクラブは、公式の革命祭典とは別に、独自に祭典を組織した。ここでも公式の祭典に先駆け、槍やボンネット帽、「ラ・マルセイエーズ」など新たなシンボルを採用しており、市議会の組織する祭典とは違った祭りの姿を提示している。またそのモチーフを革命の殉教者たちに求め、翌年に頂点を

迎える革命礼拝の基礎を築いている。こうしたシンボルやテーマが、以後の革命祭典に必須のものとなっていたことは言うまでもない。

そして市議会に多くのメンバーを送り込んだ九二年末より、クラブは革命祭典に積極的に参加するようになる。さらにはその組織に深く関わり、政治文化の領域で多大な影響を発揮した。九三年秋の祭典では、ルーアン市の「再生」を企図するクラブの意向が十分に反映されていたほか、殉教者崇拜の定着も看取できる。また九三年秋以降は、革命祭典以外にも、非キリスト教化運動やデカデーの祭典組織のあり方、演劇の上演など「公教育」全般をつかさどるようになっていった。そしてこの活動の延長上に、九四年一月の市公教育委員会の組織があるのである。九四年以後は、この公教育委員会と市議会、そしてクラブの三者がルーアン市における祭典を統制し、政治文化の革命を推進してゆくことになる。クラブは共和二年冬に、行政の領域だけでなく、政治文化の領域においても、独裁を開始したのである。^① また前稿で検討したように、共和二年以降、ルーアンのクラブがオート＝ノルマンディーの盟主として各地のクラブを指揮する立場になることを考えると、このようなクラブの活動は、市内だけでなくオート＝ノルマンディー全体に影響を与えると考えるべきであろう。本稿では、九三年末までの革命祭典の展開とクラブの関与を明らかにするため、「祭り自体」の意味を掘り下げて検討することはなかった。今後、本稿の議論を深めるためには、祭典行列のコースや自由の木の植樹場所など、多角的な分析を進めなければならないだろう。また、ジャコバン独裁期における祭典とクラブの関係もつづけて考察する必要がある。そのさいには公教育委員会の議事録をもあわせて検討し、公的機関化したクラブの態度の変化をあとづけなければならない。さらには非キリスト教化運動についても包括的な検討が不可欠であろうが、こうした問題については稿をあらためて論じることにした。

① 拙稿「フランス革命期ルーアンの民衆協会」第三章参照。

② 拙稿「革命を支えたソシアビリテ」一六四 - 一六七頁。

La fête révolutionnaire et la société populaire à Rouen (1790-1793)

Par

TAKENAKA Koji

Dans l'étude de l'histoire de la Révolution française, la société politique et la fête révolutionnaire attirent le regard. La première était la sociabilité politique, il y avait plus de 6000 sociétés en 1794, qui a changé la mentalité concernant la politique. La dernière était le moyen de l'instruction publique pour régénérer l'homme. L'étude de ces thèmes ont un problème commun: relation à la politique locale, et la nécessité d'éclaircir la réalité (l'organisateur, les participants, la structure de la fête, la politisation par la société etc.). Pour examiner cela, je cite l'exemple de la société populaire et les fêtes à Rouen pendant la période 1790-1793.

Dans les fêtes révolutionnaires de 1790 à 1791 à Rouen, par exemple, *Fédération et le service funèbre, en mémoire de Mirabeau*, il y avait nettement la continuité de la fête sous l'ancien régime. En 1792, les symboles révolutionnaires, donc l'arbre de la liberté, bonnet et *La Marseillaise* etc., sont apparus dans la fête, en 1793, l'aspect de la fête a changé dramatiquement. Les points principaux étaient le passage de l'organisateur (du conseil général de Rouen à la société populaire), la déchristianisation et la démocratisation des participants. Tandis que le thème "mort et régénération" apparaissait sous forme du folklore (autodafé) et du changement de la dénomination des places (épuration de la cité), ce thème aussi reflétait la circonstance politique et économique à Rouen: l'opposition entre le conseil général et la société, le manque de vivres et la méfiance de Paris à Rouen.

Les rapports de ces fêtes et la société ont changé à mesure que la Révolution devient plus forte. Au début, la participation à la fête était limitée, mais en 1792, la société a commencé la lutte de la culture politique par la plantation de l'arbre de la liberté et les fêtes organisées dans la société. En 1793, elle a organisé et dirigé les fêtes officielles activement, par exemple *la Fête civique en mémoire de Bordier et Jourdin*, et *la Fête civique pour célébrer la dédicace du Temple de la Raison*, en outre, elle a administré l'instruction publique en général; le mouvement de la déchristianisation, la fête de décadaire et le théâtre. Alors qu'on a fondé le comité d'instruction publique de Rouen, était constitué par les membres "montagnards" de la société, elle a commencé la dictature politique et culturelle.